

日・中初対面会話スタイル及び高齢者との コミュニケーションに関して

ト 雁*

1. はじめに

異文化間コミュニケーションにおいて、ステレオタイプや偏見、又は会話スタイルの差異により、話者間に誤解や会話時の心地悪さが起こりうることに関し、数多くの研究がなされている。同様に、健常者と障がい者、また高齢者と非高齢者とのコミュニケーションにおいてもこのような現象は存在すると思われる。

異文化間におけるコミュニケーション差異と、差異に伴うミスコミュニケーションが生じるのと同じように、健常者と障がい者の間、また、高齢者と非高齢者の間に、それぞれ特有の文化があり、また、良いとされる会話スタイルが存在するのが考えられるので、お互いに理解が足りないときの会話は、例えば、いたわり或いは援助をしているつもりでも、実は「対等的」関係としていなければ、また逆に、高齢者から見て経験を伝授しているつもりでも、実は「必要的」状況に反していれば、心地悪いものになり、場合には摩擦が起こる。特に、初対面の場合での理解の行き違いや期待値のズレは好ましくない交流効果を招く。

このような文化差異とお互いの理解度や期待値の食い違いからなるミスコミュニケーションが、民族文化的差異が加わる場合、それぞれどのような様態があり、また、どのように相互作用が生じ得るかは、とても興味深い。また斬新な着眼点であるが、これからのグローバル化社会の進展に向かって研究価値の大きいものになろう。

本論では、高齢者と非高齢者とのコミュニケーション問題に関する日本と中国の比較において、文化論的視点での考察を試みる。

2. 初対面会話スタイルの日・中比較

異なる文化を持つ話者同士のコミュニケーションスタイルが、交流回数や期間が増加するにつれて、お互いに影響し合い、受容され合うことがある。これは、Giles and Smithのア

*総合福祉学部 准教授

コモデーション理論で示唆されたように、一般には、異なる言語でコミュニケーションを取る話者同士が、互いに会話をうまく進めようとする場合、お互いが理解できることばを選んで話そうという意識が働き、結果として両者の言葉遣いが互いによく似てくる (Giles and Smith 1977: 45-65)。また、お互いの意思疎通がスムーズに行くように、会話中に相手に理解されそうにない表現を意識的に避けることなどある。これはアコモデーション理論 (accommodating theory) と呼ばれる。言語的アコモデーション理論とは、コミュニケーション上、相手との関係をどう調節するかという問題に対する洞察を理論化したもので、言語社会心理学の見方から来たものである。(トラ 2010: 201)

アコモデーション (同調・調節) を利かせる言語行動使用は勿論話者同士の関係維持や相互理解願望が前提になるが、交流開始の初対面会話では、お互いの文化的制約から来る伝達方法相違や心的距離の相違が、また、これらに対する感知や認識が特に明晰であるため、不慣れさや心地悪さも表れやすい。そこを、分析と学習を通してコミュニケーションの制御法が把握できれば、以降の交流に対してプラスの影響が大きい。そこで、初対面会話スタイルに焦点を当てて考察する重要さが出てくる。

2-1. 日・中話者の会話アプローチと会話維持言語行動の差異

多くの先行研究の中で、集団会話において中国人話者は「発言内容重視」で、「自己主張」が多いのに対し、日本人話者は「場依存的」で、「人間関係重視」であると論じられる。(Gudykunstら1988, 久米ら2000)

大学での学生指導の際に、「(自分側からのアプローチに対して) 日本人学生からあのような対応で来るとは思わなかった」とか、「中国人は会話を強要するようになる」とか「相手にどうアプローチすれば一番良いか」など、学生からの感想や相談を受けたり、また、日中交流経験のある方々の感想もよく耳にしたりする。筆者はこれまでに日・中大学生初対面交流の場での会話スタイル相違分析研究を行い、文化論的考察を試みてきた。(トラ2012, トラ2013)

中国と日本は、文化論において共に高文脈文化であると認識されながら、言語文化差異が大きい。中国人話者は初対面の仲でも、親近感を示すような「人間関係を親しさの度合いの高い関係に設定する」¹といった文化的土台に築かれる深い観念があり、更に仲が良ければ良いほど相手との距離が近くなると一般的に見られる。また、心理的距離より、話しやすいかどうかという物理的距離をもっと重視する。一方、「場を保つ」「間を大事にする」ことは日本人にとって重要な対人配慮要素の一つで、相手との「間」はより大事にされるため、話の内容や主観的表現より、相手との「適切」な関係判断を優先させる。「他」を意識して「控え目」に意思表示をすることと相手との距離的關係を意識して会話参与をする。

そのため、交流の場で中国人話者は日本人話者より積極的なアプローチと会話維持を務めるのに対し、日本人にはその努力は相対的に少ないように感じられるが、日本人学生話者の場合、海外経験の有無で、他者に対する会話アプローチの積極度には違いも出てくる。逆に、中国人話者の場合は、日本で生活している人はより日本的「控えめ」傾向を示すが、やはり、会話に間を開けるのに不具合を感じ、「親しさ」表現や親密な態度を良しとする会話継続をもっと重視する考えがあることが明らかになった。このように、日・中話者が会話をすすめる際にそれぞれ意図的に自分自身の言動をコントロールしている重点の違いがあるため、初対面会話時の日本人話者と中国人話者に見られる会話スタイル相違やアプローチの仕方が原因で起こり得る心地悪さが生じるのである。(ト 2013)

2-2. 日・中話者の対人親密度表現相違

以上の「親密に」と「間を重視して」会話参与をすることは、現象として交流の会話に対し積極的或いは消極的という違いを生み出してくるが、これは異なる文化間での言語行動基準相違によって生じたものといえる。この相違は、日・中文化間の対人親密度の価値観における相違であり、それぞれの話者が育った社会の文化価値観と社会行動基準が違うからだと考える。

『ことばと文化』(鈴木 1977)で述べられたように、「典型的な単一民族社会に育った」日本人は、「未知の他人と気安くことばをかわすことを好まない」言語行動様式をとり、言語表現も「自分と相手との間の権力の差、親疎の度合などを反映した使い分け」をした「対象依存的」性格を持ち、特に自分と親しい関係にある相手でない場合は、「相手の出方、他人の意見を基にして、それと自分の考えをどう調和させるか」のような会話方式が得意である。これに対し、印欧言語では、「話し手の言語的自己規定」が「相手及び周囲の状況とは無関係に」独立的になされ、「話し手の役と聞き手の役しか通例明示しないで対話を進めていく」ことができる²。

このように、各文化の価値観による言語行動基準相違によって、異なる文化間での対人親密度表現の相違が現れる。前述の中国人話者が親近感を示すような「人間関係を親しさの度合いの高い関係に設定する」という欧米様式の観念があり、日本と中国では異なる対人親密度表現に相違が存在する。そのため、日本人は「他人」を意識し、迷惑をかけないような心掛けを言語習慣に持ち、一方、中国人は相手との「親近」を示す友好的姿勢を重視するという「文化的対人親密度の価値観相違」が存在すると思われる(ト 2013: 67)。

結果として、日本人が相手を照準にして図る「他人配慮的発想」に対して、中国人は交流を意識するような「親密好意的発想」を持っている。

また、初対面会話スタイルにおいて、「場面回避性言語行動」と「場面依存性言語行動」

それに、「会話持続性言語行動」と「会話主導性言語行動」の4分類ができ、日・中話者の初対面会話スタイル類型分析が図れた。これは、初対面会話スタイルに関する日・中の学生会話面接調査回答分析を通して得られた分類の試みであるが、さらに、以上4つの初対面会話参与言語行動スタイルが表1の通り、積極的言語行動と消極的言語行動の区分に入れられる。³

表1. 日・中学生交流場面の初対面会話スタイル分類

消極的言語行動		積極的言語行動	
a. 場面回避性言語行動	b. 場面依存性言語行動	c. 会話持続性言語行動	d. 会話主導性言語行動

以上それぞれに分類される回答例の回答者には、a.とb.類に属す発話者は日本人が多く、中国人話者のほとんどがc.とd.に当てはまるという様式が見られた。前述日・中間の「対人親密度の価値観相違」論点が立証できる結果になっているといえる。(ト 2013: 70-72)

3. 高齢者とのコミュニケーション

アジア、特に東アジアの国々は、古来より儒教の「君君・臣臣・父父・子子」という孝悌秩序をわきまえることを「礼法」の基本とし、上代の人と老人を敬い大事にする文化があるが、それぞれの風土や歴史変化に伴い、固有の言語表現ルールに則ったコミュニケーション方法の様態があり、またそれぞれ時代の流れと共に変化しつつある。

岩隈(2007)が、「日本は世界に先駆けて超高齢化社会を迎えた。超高齢化社会は、歴史上どの国も経験したことのない現象なので、世界中が日本の動向を自国の来たるべき将来のシミュレーションとして見守っている。……高齢者をめぐる環境は激変し、彼らは尊敬される対象から、保護、いたわりそして福祉の対象へと変化しつつある。」と述べた。(岩隈 2007: 148)

このような変化に伴って人々の「老」に対する観念的な変化も次第に表れ、コミュニケーション様式に影響を大きく与えていると思われる。

3-1. 日本の社会福祉現場における高齢者とのコミュニケーション問題

日本では敬語体系が発達して、敬語には尊敬語、謙譲語、また丁寧語があり、複雑な使い分けルールがあるが、基本的に目上の人と初対面の人に対して敬語使用をするという常識的な言語使用規則がある。しかし、現在の医療現場と高齢者福祉現場ではこのような言語使用規則に異変が起こっていると考えられる。

先ず、1つ事例を見ることにする。ある大学教授が病気のため入院したが、毎日病室に来

る看護師さんから「ため口」で話しかけられる。これを不愉快に感じたこの教授の妻は、普段家で用いた夫への話し方を変えて、病室で「如何です？」や「召し上がります？」というように夫に話すようになった。夫婦の話し方の変化に気づいた彼らの娘さんがその理由を尋ねると、大学教授の妻は夫がこのように子供に対する感じで話されることにはとても耐えがたいと語ったという。看護学校でも教鞭を取った教授であり、感謝されなくとも少し敬意のある話し方がしてほしいが、直接に要望を伝えるのははばかれ、看護師に話し方の手本を見せ、影響を与えたかったということだった。

この事例は筆者が自ら聞いた話であるが、実際にどの病院や高齢者福祉施設にでも起こっているかもしれない。お年寄り、また、外国人が利用者になる場合、係りの人より常体使用の日本語で話されるところがある。筆者も病院でこのような経験をしたことがある。看護師さんや窓口係りとの会話ではずっとため口で対応され、こちらが敬語を使っているのに、全く無関係のように見下された感じの話し方をされ、しかも同じことを何度も繰り返して言われた。「普通にしゃべっていただけますか」と言うのをじっと我慢していた苦しみを覚えている。外国人だから話しは分からないだろうとか、敬語を使わなくても良いとか、ことば表現の発想があるだろうが、相手を見ていないのは問題だ。

外国人だから、お年寄りだから、ことばに対する理解が遅いだろうとか、ため口でしゃべると親しみがあるからなど、偏見につながるステレオタイプの考え方があるのは事実らしい。

ステレオタイプと偏見をテーマにした講義でこのことを話したところ、福祉学を学ぶ学生から「施設でお年寄りにため口で話すのは親近感を示すためだから、いけないのですか」という質問があった。ステレオタイプの見方や考え方を持つのも良いが、相手を見ないで一律「分からない人」「子どもレベル」のような扱いをしてはいけないと説明した。現場実習でため口表現形式の経験と知識を学んできたようだが、言語表現とコミュニケーション様式に関する指導が重要だと感じられる。

岩隈氏はこのように指摘した。「他人とのコミュニケーションの発信は、自分の内面からすでに始まっている」のであり、「それまで培われてきた高齢者のステレオタイプに沿うようにコミュニケーションをしてしまう」場合が多く、「ベイビートーク」のコミュニケーション形態が「特に施設に入所している高齢者に対して顕著にみられる」。これは、「普通に話しても通じないだろうというステレオタイプ」があるため、「本質は相手を自分と同格とは認めない『見下した』コミュニケーションである」が、「対等に見られていない」不快な感じと「真摯なコミュニケーションではないことが相手にも伝わり、不満足感だけが残りやすい。」(岩隈 2007: 150-151)

ことばは心情の表れである。人間は意識的にも無意識的にも言語的と非言語的伝達法を使いながら、相手に意思や気持ちを伝える会話内容やコミュニケーション方式で発信する。た

め口対応で不愉快と感じられたのは、相手が年寄りか外国人であっても、その人のキャリアや社会的身分が無視され、一人間としての存在はどうでも良く、発信者にとって「ことばがよく分らない」「子どもレベル」のサービス対象に過ぎないという認識が潜んでいることに原因があろう。人間はそれぞれ人生の道があり、経験ありなので、医療機関の利用者になっても同一視されるのは問題である。特に初対面の場合はそうである。日本語には敬語使用ルールがあるので、尊敬の念があればため口にならない。それから、日本語のため口は、=(イコール)「親近」ではないのである。

もし中国人利用者が上記のような言語使用による心地悪さ、ミスコミュニケーションを経験した場合、上記事例当事者の「直接に言えない」と違った反応を起こしたかもしれない。前述のように中国人は「直接的」コミュニケーション様式をとる上に、更にその者が儒教的考え方を持つ学歴や教育歴が長い人であれば、最初から交流摩擦が起こり得るのである。

3-2. 中国の高齢者福祉と高齢者とのコミュニケーション問題

中国は30年間余りの「計画生育」制度、即ち一人っ子政策の実施、また、高度経済発展の副産物として、家庭形態の「4・2・1」構造になりつつあることが問題視されてきている。「4・2・1」構造とは、現在の若い夫婦が4人の親と1人の子供を養う逆ピラミッド型の家庭扶養モデルであるが、国の介護制度が不完全という現状の中で、高齢者介護問題が深刻化になりつつある。問題緩和の一解決案として、コミュニティ養老組織依存や外資力開発導入が検討されている。

このような背景にあって、中国では福祉業界に民間企業が参入し、介護者の育成から施設運営とサービス提供まで模索しながら事業展開をしている。しかし、農村部からの出稼ぎ労働者が介護に従事するケースが多く、学歴が比較的到低い人が多いため、介護知識の学習力が低く、吸収も遅いという。また、都市部の高齢者の多くは介護者に対して相対的に学歴が高いか、或いは管理職など社会的責任がある仕事をした人たちほど、専門職の介護を受ける経済力があり、介護を受けるため、介護者の言葉遣いや知識量の限界などで、お互いに話題が合わなく、信頼関係が築きにくいという問題も出てくる。

中国語は日本語のような敬語体系はないが、人に対する呼び方に気を使う言語である。中国では、上代と目上尊敬の社会観念があり、上の世代や目上の人に対して、身分や地位、資格、名誉を備えた人に与えられた呼び方、例えば肩書き或いは親族呼称を使うような称号使用 (Title Use)、また、親族以外の目上の人に対しても尊敬 (polite) と親密 (intimate) を表す親族呼称で呼ぶ文化がある。それは、相手に対して尊敬と親近という2つの要素が一致すれば、「親族呼称の虚構的用法 (Fictive Usage of Kinship Terms)」(親族でない人に対して親族呼称を使用する呼び方) が成立し使われる (ト 2004: 317-322)。

しかし、西洋文化の浸透と影響による言語概念変化に伴って、この用法もある程度の階層差が出ている。特に経済開発が進む東部沿海地域では、介護型養老施設の従業員数が不足し、地方からの介護者雇用が強いられるが、彼らは言語慣習上の「尊敬」と「親密」を表す上代向け親族呼称を富裕層の利用者に多用したら、初対面の場合での不愉快も引き起こす。これは、前節日本語コミュニケーションの場合と同様に、社会地位や身分を持ち、或いは西洋文化の影響を深く受けている利用者にとって、自分は高齢にはなっているが、キャリアや社会的身分が無視され、言語対応上で一上代の人に過ぎないと受けられるのは、「親密」以前に「尊敬」が足りないことになる。興味深いことに、中国人は親しさの度合いの高い交流を意識するような「親密好意的発想」は、そもそも交流対象との「対等的」或いは「非ビジネス的」関係が前提になっているとも考えられる。これは介護者を含む中国語話者が注意したいことで、改めて論じる必要が生じているといえる。

4. 日本と中国の高齢社会化と社会福祉事業グローバル化関連

高齢化社会に関して、日本の今日の状況は我々の明日の姿であると中国の経済学者たちが言うが、両者の社会発展の様式と経済基盤、また、観念的及び制度的違いからなる様々な様態が呈示される。

4-1. 高齢者人口の増加と高齢者福祉施設の現状

現在、中国の高齢者数が増え、社会の高齢者化が進んでいる。Jetro（日本貿易振興機構）北京事務所による文書『中国高齢者産業調査報告書』（2013）に詳しい記述がなされている。

中国国家统计局が2013年1月に発表した最新人口統計データによると、2012年末時点、中国大陸部（香港・マカオ・台湾など含まず）の人口は13億5,404万人に達した。60歳以上の高齢者人口は、全体の14.3%に当たる1億9,390万人、そのうち、男性が49%、女性が51%となっている。65歳以上の人口は1億2,714万人、全体の9.4%を占める。また、そのうち、60～69歳は56.2%、70～79歳は32%、80歳以上は11.8%を占める。（p.2）

中国では、60歳を定年の規定年齢としているので、高齢化指数は60歳以上人口を基準にしているが、日本等諸国の定義に合わせ、65歳以上人口の割合を算出すると全体の9.4%となり、これは、中国が「高齢化社会」と呼ばれる段階にあることを示している。しかし、中国の基準で定義する場合、60歳以上人口の14.3%では、「高齢社会」になっている。それから、中国政府2011年4月発表の第6回全国人口調査のデータによると、0-14歳人口は2000年調査時より6.29%減り、60歳以上の人口は2000年調査時より2.93%上昇した。その内65歳以上

人口は8.87%を占め、2000年調査データより1.91%の増加になる。これは、高齢者数増加が速くなり、65歳以上人口計算での「高齢社会」到来は次の10年内のことを意味する。

Jetroの報告書にも記述されたように、中国政府の予測では都市部の介護型養老施設市場規模は大幅に成長する見込みで、今後、政府の優遇策を利用し、民間企業の参入が更に増えると見られるが、高級老人ホームのターゲットとなる富裕層はハイレベルのサービスを求め中、中国ではそれに対応できるノウハウや人材が不足している。今後、運営コンサルティング、業務委託など役務提供契約といった形で日本企業と提携するケースも増えてくると考えられる。(Jetro 2013: 44)

以上中国の高齢化社会の進展状況に対して、日本の高齢社会化の現状は更に顕著である。内閣府が発表した『平成25年版高齢社会白書』によると、65歳以上の人口は24年10月時点で過去最高の3,079万人(前年2,975万人)で、総人口の約24.1%(前年23.3%)となった。既に「超高齢社会」という定義にマッチしている。

中国の経済発展が未成熟のままで高齢化が進んでしまったのと違い、日本の高齢化社会への対応は社会的と経済的、また制度的に発達している。しかし、高齢者福祉施設での人手不足問題は普遍的に存在する。

ある施設の例だが、1フロア52人の利用者に対して3、4人の介護士が世話するのは現状で、初めて利用する利用者や、短期間利用の人が慣れなくて落ち着かないのに人手が足りなく、対応が難しい。特にこのような利用者から嫌味を言われたり、注文が多い時は解釈と説明をしても、「自分が知ったことじゃない」というような不満が来たりする。最初の出会いでは、お互いの探り合いともいえるべく、施設ではコミュニケーションの問題が絶えないという。施設側から見ると、新しい利用者に対して、神経質そうな人に特に気を付けたり、介護者が介護時にイライラをすぐに出すことを防ぐ意識などをやるが、限度がある。また、実習生からも介護者の「言葉遣いが良くない」というような苦情が来るが、相当気力が掛る仕事をこなさないといけない介護者にとって、個別の利用者に掛かれる時間が限られ、手荒なことは気にしないことがあるのも確かである。今、この施設には韓国人介護士、中国人相談員、ベトナム人の洗濯係がいるという国際色ある雇用パターンだが、日本人従業員の募集はしても人が来ないのは現状である。実習生を来てもらうように勧誘しても、特に古いところには皆行きたくないらしい。

この施設に、ある中国系の認知症のある高齢者がショートステイを利用した。言語習慣も周りの環境も介護者との話しも合わなく、毎日家族もびっくりするような困った言動をして、暴れたりしたという。そこを中国人相談員が介護の場に立ち入り一緒に助けるが、困難のある介護だった。

今年6月に日本の法務省が発表した「平成24年末現在における在留外国人数について(確

定値)」によると、中国本土⁴から来日している中国人数が65万を超え、それに、日本国籍を取得した在日華人は12万人以上、また、文化的意義上の中国人である日本へ帰国した第二次世界大戦残留孤児とその家族5,200人を加えると、在日華人の統計人口は82万に達した。

在日の中国人口数の中身には39歳までの若い世代が半分近くを占めるが、その一方で、帰国残留孤児とその配偶者や30年前に来日し定住した新華人たちも老いてきている。特に華僑華人集中区域では、現在調査データはないが、既に老人ホームの中国人利用者がいるのは現実であろう。介護開始時の介護者と利用者とのコミュニケーション問題発生回避の実現を考えるのも必須になると思われる。

4-2. 社会福祉事業のグローバル化とコミュニケーション様式の相互理解

日本の看護と介護人手不足解消策の一環として、最近では日本の病院で働く中国人看護師が急増し、高齢者福祉施設に中国人の介護学習者も増えている。

ある台湾からの留学生の話から、日・中文化差による非高齢者と高齢者とのコミュニケーション様式と「敬老」に対する観念的差異を垣間見ることができる。

中華式敬老観念を持っているこの真面目な留学生が日本の老人ホームでの研修で初めて感じた困惑は介護者が利用者の高齢者に向けた「子ども扱い」の態度だった。介護者は認知症の老人に対しても非認知症の老人に対しても言葉遣いが荒く、「尊敬」が感じられなく、しかも、話を聞かない利用者に辛抱強さが欠けていたのがあった。敬老尊老の文化理念で育てられたこの留学生にとって、ハードな仕事をこなしている介護者たちの大変さは理解できるものの、高齢者に対する態度には賛成できず、自分が時間がある限り、特に話しが好きで一人ぼっちの利用者と話しをし、細かく世話をしていた。認知症の症状が深刻で、10分前の話も忘れる利用者に対しても彼は「お年寄りだから、できるだけ関心を注ぐ」ことをして、話しに付き合った。

しかし、一旦1ヶ月の研修が終わり、施設を離れることになると、彼に話を付き合ってもらった老人は大泣きをし、大変悲しんだ。そしてこの留学生が、自分が親しく接したのは本当に正しかったかと反省の念もあったという。もし、自分の尊敬の心を込めたお話し付き合いがなければ、このような利用者たちの一時的な喜びもなかったかもしれないが、普通に生活していたのだらうと自省し、次回からはやり方を変えて、中間を取るようにしたいと語った。

この事例からは、どのようなやり方が良く、また、日本人介護者と中国（台湾）人介護者の考え方のどっちが正しいかというより、両者の敬老観念に差があることが明らかだと考えられる。中国人は小さい時から敬老愛老の教育を受け、「孝」を一番重要視する美德だと認識している。自分の家の老人はともかく、他所のどこかの老人がいじめられたりすることが

あると公衆の怒りが向けられるように、社会的共同観念基準になっている。これは電車や路線バスでのお年寄りに席を譲る行動からも伺える。中国大陸や台湾で老人に席を譲っていると旅行の感想を述べる日本人と、日本で皆老人に席を譲らないことにびっくりしている中国大陸や台湾人とが対照的になる。席を譲ることは中国人の生活の中で多く経験したもので、誰でも自然にやり、立っている老人を前にして席に居座るのは「孝行心」という中国人の道徳観に反するのである。孝行心とは目上の人々に対する思いやりであり、中国の文化価値の根幹をなしている。

日本の施設は技術があり、制度も優れているが、お年寄りに対する態度には尊敬と心が欠けていると感じたと中国語圏の研修生や実習生が感想を言うが、今後も在日中国人は増え続けると予想され、医療施設や養老施設に仕事や研修に来る看護師や介護士も増えることになるので、初対面時の食い違いをお互いを感じながら仕事を共にすることより、事前教育段階での相互理解を目指した指導が必要に感じられる。

支援の人材育成や福祉事業進出に伴う技術及び人材投入には、必ず現地文化の思考方式とコミュニケーション様式との相違にぶつかるが、この面の教育も系統的にできれば、高い事業成功率にもつながるだろう。

5. おわりに

中国は高齢化社会が進む中、日本に学ぶものが多いのは言うまでもない。中で、日本の介護技術と専門知識を学ぶと同時に、文化理解と言語の文法外言語運用も教わりたい。反対に、中国人の敬老観念に伴う会話、特に初対面時の高齢者に対する話し方が日本の高齢者介護現場の参考にもなるだろう。

前述のように、人に対して敬意があるかどうかはことばに現れる。また、上代尊敬の言語様式は敬語や呼称にどのように表れるかという、文化的差異から来る異なった方式を理解し、お互いに応用できるのも援助技術の一つといえよう。

異文化間での高齢者とのコミュニケーションに関する研究はまだ新しく、普段の生活や福祉現場での非高齢者と高齢者、介護者と利用者、従業員の日本人と中国人、または現場におけるアジアの国々の職員間でのコミュニケーションに関する実態調査をした上での考察が必要であり、課題が多い。本論文では、呼称の日本語と中国語の使用現状と問題検討や、職場での日・中話者のコミュニケーション問題分析など言い残すものも多い。また、在日華人の高齢者人口調査及び福祉現場の外国人言語使用と日本語文法外言語運用問題などの研究も求められるところであろう。地域文化特性の違いとそれぞれの言語表現の相違を理解し合えることが、円滑なコミュニケーション実現につながり、これは被介護の方々に対して有益にな

るばかりでなく、協調した共生社会の発展設計にもつながる。

社会福祉教育と介護技術教育現場では、こういった将来型の対人関係に配慮のできる人材が備わる豊かな人間性育成のために、異文化コミュニケーションと異文化理解教育が必要であり、また、教育においては、言語表現相違を現象観察に留まらず、文化的要因を探究し、規則を理解させることが、異なる文化を受け入れる寛容さを持つ人間が育てられ、異文化話者間の良いコミュニケーションと良い関係確立の助力になると考える。

(付言) 本研究の事例提供をしてくださった皆様に深謝する。

注

- 1 トラ (2012), ト (2013) で引用: 重光由加「何を心地よいと感じるか—会話スタイルと異文化間コミュニケーション—」井出祥子ら編『講座社会言語科学1 異文化間コミュニケーション』ひつじ書房 (2005, p.235)
- 2 鈴木孝夫 1973『ことばと文化』岩波新書 (pp.187-203)
- 3 例えば「会話が途切れそうになった時にどうするか」の回答例では、「何もしない」「途切れても良い、沈黙」のような回答があり、このような言語行動は、会話の場において積極性がなく、会話の消極的参与と見て、「場面回避性言語行動」と考える。また、「相手によってさりげなく努力する」「雰囲気を見てとりあえずことばを発する」のような行動は相手次第で会話参与をする言語行動と見て、「場面依存性言語行動」と考える。一方、「話題を探し相手の様子をうかがい、取りあえず続ける」「何かと話しかける」のような行動は能動性ある会話参与姿勢とアプローチと見なし、比較的積極性のある「会話持続性言語行動」とする。最後に、「同じ関心の話題を探す」「他の人も会話に誘う」のような行動は会話リードができる積極的な参与姿勢と考え、「会話主導性言語行動」と名付ける。このように、4つの初対面会話参与言語行動スタイルに整理できると考えられる。(ト 2013: 70-72)
- 4 法務省は平成23年末までの外国人登録者数に関する統計で台湾を中国に含めていたが、新しい在留管理制度では、国籍・地域欄に「台湾」と表示されることになり、今回の統計では中国と台湾を別にして集計されている。(法務省HP 2013)

参考文献

- 岩隈美穂 2007 「第7章 障がい者、高齢者とのコミュニケーション」『多文化社会と異文化コミュニケーション』(pp.140-159) 伊佐雅子監修 三修社
- 久米照元・徳井厚子・徐一平 2000 「コミュニケーション様式の日米中比較研究—小集団討論の質的分析を通して—」『平成11年度COE 形成基礎研究費研究成果報告 (4)』神田外語大学
- 重光由加 2005 「何を心地よいと感じるか—会話スタイルと異文化間コミュニケーション—」井出祥子・平賀正子編『講座社会言語科学1 異文化間コミュニケーション』ひつじ書房
- 中国新聞網 2011 《2010年第六次全国人口普查主要数据公报 (第1号)》(www.chinanews.com) <http://www.chinanews.com/gn/2011/04-28/3004638.shtml>
- ト雁 2004 「呼称におけるポライトネス心理考察—親族呼称の虚構的用法に関する日・中・英語比較—」『淑徳大学社会学部研究紀要』Vol. 38, (pp. 313-328)
- ト雁, 山口若菜, 裘曉蘭 2010 「語学教育法開発における—探究—中国語教室運営の試みを通して—」『淑徳大学総合福祉学部研究紀要』Vol. 44(pp. 197-217)
- ト雁, 星見友香 2012 「異文化コミュニケーションにおける会話スタイル相違に関して—日・中

- の学生初対面会話スタイル比較考察— (その1)」『淑徳大学研究紀要』Vol. 46 (pp. 115-133)
- ト雁 2013 「異文化コミュニケーションにおける会話スタイル相違に関して一日・中の学生初対面会話スタイル比較考察— (その2)」『淑徳大学研究紀要』Vol. 47 (pp. 57-74)
- Giles, H. & Smith, P. M. 1979 Accommodation Theory: Optimal levels of convergence, *Language and Social Psychology*. Edited by Howard Giles and Robert St. Claire, Oxford: Blackwell
- Gudykunst, W. B., Ting-Toomey, S., Chua, E. 1988 *Culture and Interpersonal Communication*. Sage Publications
- Jetro (日本貿易振興機構) 北京事務所 2013『中国高齢者産業調査報告書』

The Style of Initial Conversations in Japanese and Chinese when Communicating with the Elderly

BU, Yan

Recently, to mitigate understaffing issues in nursing homes and medical organizations, there has been a rapid increase in nurses from Asia, particularly from China, working in Japanese hospitals, and Chinese nursing students in nursing homes. In addition, among the Chinese living in Japan, there are Japanese war orphans who have returned to Japan and Chinese immigrants who settled in Japan 30 years ago, and both of these groups are now aging. Thus, it has become important to study the actual usage of nursing homes and medical care facilities by foreigners, the problems arising from ideological differences about the aged and the cultural differences in the communication styles between the elderly and nonelderly, and the communication issues between Japanese and Chinese employees and between staff members from other Asian countries.

Similar to miscommunication issues that can arise from cultural differences between Japanese and Chinese speakers in any encounter, when mixing cultures (and at times with the additional regional cultures) between the elderly and nonelderly, differences in language can be a source of “bad feelings” between the speakers, particularly in their initial conversation. Thus, education in communication skills in schools for social services would no doubt be useful. This paper will investigate this new perspective in communication discontinuity.